

県小中学教研会報

発行 石川県小中学校教育研究会
 金沢市八日市1丁目176番地
 金沢市立押野小学校内
 電話(076)241-4197

編集 石川県小中学校教育研究会
 広報部

印刷 株式会社 山 越

ご挨拶



石川県小中学校教育研究会
 会長 村上 誠

石川県小中学校教育研究会第
 十一回研究大会を七月二十八日
 に今年度もオンラインにて開催
 しました。県内多くの教職員の
 方々にご参加いただき、誠にあ
 りがとうございました。また、
 石川県教育委員会、市町教育長
 連合会、石川県小中学校長会、
 石川県PTA連合会の皆様には
 日頃より本研究会の活動を支え
 ていただき、この場をお借りし
 まして心より感謝申し上げます。
 本研究会は、石川県内の小中
 学校における教育の質の向上を
 目指し、平成二十四年六月に十
 六の郡市学校教育研究会、二十
 四の各教科等の研究団体が結集
 し設立されました。
 教職員が多くの教育課題に適
 切に対処し、一人ひとりの子ど
 もの「生きる力」を育成するた
 めには、県内の小中学校教職員
 が指導力、実践力の更なる向上
 を目指し、互いに切磋琢磨し、
 「授業研究の文化」を継承発展
 させることが重要であると考え
 ます。この設立趣意を実現する
 ため、県内の小中学校教職員が、
 一堂に会して教育研究会を開催
 するとともに、そのネットワー
 クを県内全域に広げ、授業研究
 や情報交換等の教育研究活動を
 活発に行うことで、本県の教育
 の充実と児童・生徒の学力向上
 に貢献したいと考えています。
 設立以来、着実に研究実践を

重ねて参りました本研究会でし
 たが、コロナ禍当初の一時中断
 を経て、一昨年度より感染症対
 策としてオンラインでの講演会
 開催を実現するに至りました。
 そして、一歩ずつですが、確実
 に前進ある研究会の運営をとい
 うことで、昨年度より分科会の
 開催も行なってきました。アフ
 ターコロナを迎えた今、従来の
 ような集合型研究会はもろろん
 大事だと考えますが、児童生徒
 に一人一台端末が整備され、そ
 の一層の活用が求められている
 中、私たち教職員もオンライン
 によるメリットを最大限に発揮
 することも重要であり、同時に
 それが業務の効率化や働き方改
 革にもつながるものと考えてお
 ります。
 また、コロナ禍で制限されて
 きた教育活動のうち、真に必要な
 なものを積極的に実施しながら
 GIGAスクール構想のもとで
 生み出されてきた多様な教育実
 践の工夫を生かし、さらなる進
 化を図っていくことも大切です。
 そして、学習指導要領の着実な
 実施とICTの活用により、「令
 和の日本型学校教育」の構築を
 目指し、全ての子どもたちの可
 能性を引き出す、個別最適な学
 びと協働的な学びの実現に向け
 これまで以上に全教職員が切磋
 琢磨し授業力向上に努めなけれ
 ばなりません。

会員ならびに関係団体の皆様
 におかれましては、本研究会の
 運営にあたり今後一層のご理解
 とご協力を賜りますことを心よ
 りお願い申し上げます。

令和五年度
 石川県小中学校教育研究会
 第十一回研究大会
 令和五年七月二十八日(金)
 ライブ配信

《記念講演》

演題「GIGA端末の活用
 次のフェーズの授業つ
 くり」

講師 放送大学客員教授
 佐藤 幸江(さとう
 ゆきえ)氏

石川県の先生方は一人一台端
 末を授業等でどれくらい使用し
 ているだろうか。

OECD加盟国を見ると、日
 本は一時間の授業の中で端末を
 使用している割合が最低である。
 日本はコンピュータを使って
 宿題をする頻度もOECD加盟
 国で最下位である。その反面、他
 国と比べてネット上でのチャッ
 トやゲームを利用する割合は高
 く、子どもたちはこれまで遊びの
 道具として使ってきたことが何
 われる。それらを真の学びの道具
 として使うためには、小学校か
 ら正しく端末を使用することに
 よって改善していく必要がある。
 現在、地域格差はあるが、一人
 一台端末は授業で八割を超える
 割合で使用している。教師が端
 末を使用し、児童生徒とともに学
 び方を決め、生徒が主体的に学
 びに取り組めるロードマップの

中で、自分で使う・使わない選択
 をすることがとても大事である。
 子どもたちが生きていく
 Societyの社会は、サイバー空
 間内のビッグデータをAI等が
 解析し、人間がうまく使って安
 全・安心で平和な社会をつくる
 社会である。学校では、一斉伝
 達型授業の中で知識を蓄え、そ
 の知識を基にして何かをする
 ということは徐々に陳腐化して
 いき、社会変化のスピードに合
 わせて「自分で課題を見つけ解決
 する力」を必要としている。

日本の学校は、世界に誇れる
 日本型学校教育を維持すると共
 に、集団から個への転換、平等
 から個別最適化学習への移行、
 丁寧な教授から子ども主体性へ
 の授業へと変化していかなく
 ばならない。これまでの「一斉指
 導」では「共通の課題」「時間の
 制約」「同じ教材」「たどり着く
 のは同じ答え」の四要素があっ
 たが、ここからの転換をしてい
 かねばならない。個に応じた指
 導は一九八〇年代からあるもの
 の、なかなか進んでいない。自
 己調整力を大切にしながら、よ
 り質的向上を目指していきたい。
 「子どもたちが自分で動き出
 すような授業」は、先生がちょっ
 と我慢をしながら、子どもで
 やっていくというところを意識
 して授業づくりをする。「協働
 的な学び」「個別最適な学び」
 「一斉的な学び」が、教室の中で
 混在するような授業展開もこれ
 からは考えられる。また、「個別
 最適な学び」と「協働的な学び」
 に向けた「デジタル教科書・デ
 ジタルコンテンツの活用」につ

いては、その実現に向けて事例集や研修動画等を通して研究し、「個別最適な学び」のみならず、自分の考えをまとめる「プロセスの構築」が大事となる。

「情報モラル教育」の捉え方については、不適切なWebページ等の閲覧など、問題が起きた時どのように指導するのかを検討し、計画的なアプローチを考えたおかなければならない。これらは道徳科のみならず、様々な教科でやっていくべきである。

「授業の転換」が多くの先生方のハードルになっている。これまでは知識を評価する授業だったが、思考力・判断力・表現力を評価する授業にするにはどうしたらよいのだろうか。「子どもたちが教わる授業から学習者が学び取る授業にしていく」ためには、どんな授業をデザインしていけばよいのか、どんな教材を考えたらいのか等の知見を蓄積していき、今後も挑戦する学校文化に力を発揮していただくとありがたい。是非、この時期をチャンスと捉え、「子どもたちの未来への力を育てる」ということをキーワードにさらなる授業改善に取り組んでいけるとよい。

《記念講演感想》

・今は思考力・判断力・表現力がとても重要になってきており、子どもたちにその力をつけていくために協働的な学びがとても大切だと分かりました。子どもが興味をもって知りたい、学びたいと思える授業を作っているためにどんなことができるかまた校内研修会などを設けて考え

ていきたいと思いました。

・実際に今の職場の現状を踏まえたうえで、ICTを活用した授業展開の方法を紹介していただき、たいへん勉強になりました。実際に私もICTを使って学習しようと心がけていますが、まだまだいろいろな方法があるのではないかと思索することができました。

・GIGAがこの数年で進み、子どもたちにとっても教師にとっても学習において便利になったところはありますが、低学年では特に文房具の一つにするにはまだまだ難しいです。しかし、AIなどがこれからもっと身近になる子どもたちには、タブレットなども有効に使い、自分で考え学んでいけるような授業づくりが大切だと思います。

・「次のフェーズ」について、本校でも個別最適な学びと協働的な学びの一体化の授業スタイルを模索しているところです。どのレベルの子も全員が主体的に学びに向かうための授業、全員ができた、わかった、学んでよかったと思える授業について、教師も探究していかなければならないと思いました。

・個別最適な学習と協働的な学習の良さを活かし、取り入れながら学習のねらいに迫る授業作りを行っていきたいです。また、生成AIのような現代、未来を見据えた教育を行い、子どもが生きて活躍するための思考力等を育てるための授業をしていきたいです。講演を聞かせていただき、二学期に向けての意欲が高まりました。

・ICTの取組に関して大変に参考になりました。日本はまだまだ授業中における端末の使用率が低いということが分かりました。これからの学校教育の中で子どもたちが二〇三〇年以降シンギュラリティを経験する可能性のある中で、学校教育として何ができるのかをとらえられるような視点を持ちたいと思いました。

・これまでも「令和の日本型学校教育の実現」に向けて、繰り返しお話を聞くことがありましたが、今回これだけ整理されてこれからの授業づくりについてお話を聞くことができ、とても参考になりました。管理職になり、自分が授業をすることができなくなりましたが、やってみたいくなりました。本校の先生方にも伝えていきたいです。

・個別最適な学びを実現させるためには、自己調整力が重要になってくるということを、講演を聞きながら考えておりました。もし、子どもたちがイニシアチブをとって端末を活用していくようにするならば、子どもたち自身で学べるという土台が必要になってきます。そのためにはソーシャルスキルを身につけていくことも重要な視点だと感じました。家庭の教育力が下がり、ソーシャルスキルを学校でも育てていかないといけないというのが現場の実情です。それを解決するためには、学級経営がより一層重要であること、良質な一斉授業を子どもたちがたくさん経験していることも大切になってくると思いました。

・解のない時代でこれまでの授業のあり方がよしとする感覚だけでは時代の流れに合わないのだと改めて感じました。本校でも同じような話をしていたので、大変勉強になりました。一斉、協働、個別の学び方が一つの授業の中で混在する授業は個人的にはとてもいいと思うのですが、見る人によってはまだ評価の分かれるものであるのも事実だと思います。すごく考えさせていただきました。

教科等別研究協議会報告

第一分科会

発表①「石川県公立小中学校教育事務研究会 金沢市立南小立野小学校 主任主事 中野 恵 小松市立稚松小学校 主任主事 田中佑里香」

「学校のスタッフとして生き生きと働く！自由な発想で学校事務をデザインする」を研究主題に報告が行われた。平成二十九年年度の法改正以降、事務に「従事する」から「つかさどる」となり、「共同学校事務」が制度化されるなど目まぐるしく変化の中で、新たな役割を理解し、実行するために、どのようなスキルが必要か、またどのように学校運営に参画したらよいかについて「仮想共同事務室」「育成指標（案）」とNITS研修ビデオとの関連付けの二つの取組について紹介された。

「仮想共同事務室」の取組では、各地区の課題を出し合い、複数の事務職員で課題解決を行う体験を行った。成果として、新たな視点の気づきがあった。



「話し合っている内にひらめきがあった」「自分の考えを言いやすくになった」などという声があった。この成果を各学校に還元し、学校運営に生かすことを考えている。

「育成指標（案）」とNITS研修ビデオとの関連付けの取組では、学校運営に参画するため、研究会で作成した事務職員版の育成指標（案）をNITSの動画教材と関連付けて石川県事務研Webページに掲載した。これにより、経験年数別、身につけたい能力別に時間や場所を問わず研修できるように、「個別最適な学び」の実効策として有効なものとなった。

研究を通し、資質向上、学校運営参画への具体的な道筋や実効策を得ることができた。

発表②「石川県算数教育研究会 志賀町立富来小学校 高橋 晃子」

「伝えたい、聴きたい、高めた子」「学びの深まり」を実感できる授業を目指して、「研究主題に報告が行われた。志賀町学校教育モデルS（志賀町スタイル）D（単元デザインシート）Y（ゆさぶり）」を元に、「ゆさぶり」を中心にした授業改善の工夫を行った。授業では、何を学ぶのかを児童に理解させ、児童の言葉で課題を設定し、考

えを持たせたり、交流させたりする中で、学びを深めるために意図的に「ゆさぶり」を行った。「ゆさぶり」は、発問だけでなく、動画、写真、誤答などを用意し、思考の活性化を目指した。また、どのような「ゆさぶり」を行ったかを週案に記録する取組も昨年度から行われ、今年度はフォルダでも共有できるようになった。成果としては、「ゆさぶり」を考えることでつけた力を意識したり、児童がどこでつまづかを予想したりすることで教師の意識改革へつながっていることがあげられた。今後は児童同士の「ゆさぶり」もめざしている。課題としては、「ゆさぶりミーティング」を行ったものの、検証が曖昧だったことがあげられた。また、学力の二極化に対応した単元デザインを考える必要があることも今後に向けての取組として報告された。「ゆさぶり」を生かし、「授業者主体」から「学習者主体」へと取組のアップデートを模索中である。



第二分科会

発表①「石川県語の会 金沢市大浦小学校 駒口 暢教諭」

「子どもとつくる国語の授業」を研究主題として、子どもが主体的に取り組む授業実践についての発表がなされた。①一人一人が大切にされている授業②主

体的に学習に参加している授業③「合い」の姿のある授業④変容のある授業を「子どもとつくる授業」と捉え、授業研究に取り組んだ。視点1「言語活動の充実」と視点2の「深まりのある授業にするための教師の手立て」の二つの視点から研究主題に迫り、授業実践を積み重ねた。視点1では、授業者が付けた力を明確にする際に、①既習とのつながり②児童の実態の二点を明確にし、言語活動を精選することで子どもにとってシンプルで学びがいのある単元構成につながった。また、言語活動の設定や交流の目的や方法を教師の指示だけでなく、子どもと共に練り上げる場を設け、それらを継続的に指導することで、子どもが主体的に参加することにつながった。視点2では、ICTの活用において「考えの共有」「学びの深まり」「学びの自覚」などの場面で効果的であること、特に「情報の収集・分析」や「児童間の相互交流」などは、ICTを活用することで、子ども一人一人の考える視点につながっていたことが明らかにした。



発表②「石川書写教育研究会 能美市立和気小学校 清川健一教諭」

「基礎・基本を大切にし、意欲的に考えて書く子を育てる書

写指導」を研究主題として実践発表がなされた。高学年の授業において、練習する際に水書活用を行った。紙の追加が必要なく何度も繰り返し練習することができ、児童は落ち着いて意欲的に練習量を増やすことができた。一方、乾くと消えてしまうというデメリットがある。そこで、作品を一人一台端末で撮影しClassroomに投稿することで、児童同士で交流・相互評価することができ、教師も個々を評価することが可能となった。また、富山県書写書道研究会顧問の立石浩一氏より、書写を指導する上での心構えやポイントについてご講演いただいたことを実践した。①学習の構えをつくる手立てとして、気持ちを穏やかにし、正しい姿勢・執筆法を身につけること②主体的に学ぶための枠作りとして、めあてをもつ課題を考え、書く練習をする↓ふりかえりのできるようになったこと、できなかつたことをはつきりさせるといふシンプルな授業展開とした。この授業展開で教師が達成させる事項を明確にして児童に示し、達成できていたら大いに評価することで③毛筆で書きたい意欲・楽しさをつないでいき、児童が主体的に学ぶ姿を引き出していくことを確認できた。



第三分科会

発表①「石川県社会科教育研究会 金沢市立野田中学校 坂井宏行教諭」

「会員相互の研修と県内社会科教育の振興を目指して」を研究主題として、石川県社会科教育研究会の活動報告がなされた。石川県社会科教育研究会は、小中高三校種による研究大会を毎年実施している。指導案検討会や研究大会、情報発信等の取組を行うことで、会員相互の研修の機会を確保し、県内社会科教育の振興を図っている。昨年度は、



①児童・生徒が問題意識を持ち、社会との関わりがわかる教材、②児童・生徒の深い学びを実現する問題解決学習、③児童・生徒が学習したことを次の学びに生かす評価と指導、を三校種共通の視点として設定した。指導案検討会では、模擬授業を行い、先の三つの視点を踏まえて、校種を超えての活発な意見交流が行われた。研究大会は、小中高各一本の授業が公開された。大会後の参加者によるアンケートには、異校種の社会科教員が一同に会する場として有意義なものであったと捉える回答が多く寄せられた。三校種揃った研修の機会となったことは成果であった。今後も会員の研修の場となるよう、会の運営を見直していきたい。

発表②「石川県小学校社会科研究会 金沢市立扇台小学校 氏原弘樹教諭」

「子ども自ら学びに向い、公民的資質の基礎を養う社会科教育―『明治の国づくりを進めた人々』開業百五十年鉄道開通と大隈重信』の実践を通して―」を研究主題とし、①子どもが問題意識を持ち、社会とのかかわりがわかる教材、②子どもの深い学びを実現する問題解決学習③子どもが学習したことを次の学びにいかす評価と指導、の三つの観点からの実践報告があった。①では、時代の変化がわかる二枚の絵の比較や鉄道コーナールの設置により、移動手段の進歩への興味を持てるようにする等、児童と教材との距離を近づけた。②では、鉄道建設反対派の存在にも触れ、大隈重信の熱意や将来への展望に気づけるようにした。③では、学習のふり返しにおいて、鉄道開通が豊かで強い国づくりに繋がったかを根拠と共に書くようにしたこと、個々がある場面に立ち、考えを深化させたり、自己の考えの変容に気づいたりすることができた。単元を通して、各人物の業績をその人物の思いや考えを入れて表現するようにした。これは、国づくりに関わった人物の願いや働きなど、単元の中で獲得したい見方や考え方を身に付けるのに有効であったと考えた。



の場となるよう、会の運営を見直していきたい。

研究会紹介

石川県図工・美術教育研究会

本会は、昭和四十七年に石川県の図工・美術教育発展のために、第一回目の大会が金沢市で開催され、昭和・平成の時代を経て、本年度で五十二年目となります。

平成二十九年に石川県小中学校教育研究会への加入をしてからは、学教研でのローテーション割当に準じて、毎年一回の県大会を行っています。コロナ禍であっても研究を持続させ、令和二年度の七尾大会では、参観者は呼ばず七尾市の部員のみで開催しました。また、令和六年度の大会開催地は「珠洲・鳳珠・輪島」大会の予定でしたが、「奥能登」大会と地域割りを学教研の地域区分に合わせました。このように、学教研へ加入したことで、①ブロック毎の開催となることで、他研究会との調整により、各開催地でのメンバーを集めやすい、②広域（奥能登、中能登、河北郡市）での開催により、図工・美術教育に関する連絡、調査、研究の交流が促される、等が善処されたことと認識しています。これらのメリットを生かして、石川県の図工・美術教育に関する諸問題を研究し、その振興に寄与することを目指して研究を進めています。

本年度の会員は、県内の小学校教職員百九十三名、中学校職員六十九名の計二百六十二名から成り、以下の事業を行っています。

- 1、図工・美術教育に関する連絡、調査、研究
- 2、毎年一回の県研究大会の開催
- 3、各種関係機関との連絡、協議
- 4、その他、本会の目的達成に必要な事業

年間活動のひとつとして、毎年六月に第一回研究委員会（代議員会）があります。石川県内の十三の市町より原則として小学校一名、中学校一名の代議員を選出してもらいます。令和五年度の代議員は十八名です。また、会長をはじめ、監査、事務局等の役員、計九名の合計二十七名で研究委員会を開催します。

内容としては、代議員自己紹介、役員・監査選出承認、会長挨拶、前年度決算報告、当年度予算案確認、各市町の研究計画について情報交換をしています。また、その年の研究大会開催地の説明もあります。本年度は、「金沢大会」で、金沢市中教研（美術）・小教研（図工）が、授業研究と実技研修会について、準備を進めている説明がありました。この実技研修会は、参加される先生方の「実技指導力向上」をねらいとして、事前に本会員に Google Forms アンケートで希望調査し、希望の多かった複数の実技体験を実施する予定です。小学校では①工作（クランクなど仕組みを生かした工作）、②立体（身辺材料を生かした造形）、③造形遊び（造形遊びの実践）、④絵画（絵画指導の実践交流）、⑤ICT（アニメーション等の実践）の五つが計画されています。中学校では①ラ

ンプハウス（ペーパークラフトによる家型のランプシェード制作の実践）、②彫刻が語りかけてくるものとは（彫刻作品の鑑賞授業の実践）の二つが計画されています。また、来年度の「奥能登」大会の開催地である珠洲・鳳珠・輪島の方々が早々に準備をスタートさせているとの連絡も届いています。こうした「つながり」を大切にしたい運営を目指しています。

（文責 金沢市立扇台小学校 野島 慎二）

石川県学校体育研究会

石川県学校体育研究会では、県内小中学校の児童・生徒の体力向上や体育科学習を行う指導者の授業力向上をめざして、多くの事業に取り組んでいます。その一つとして、令和四年十一月十八日には、加賀市立片山津中学校及び加賀市立作見小学校、加賀市立錦城中学校において、第六十七回石川県学校体育研究大会・加賀大会が開催されました。「豊かな心とすこやかな身体を育てる学校体育を求めよう」を大会主題として、多くの先生方に参加を頂きました。午前の部の講演会では、「コロナ禍において子どもたちの体力・運動能力を向上するヒント」と題して、石川県立大学教授 宮口和義先生のお話を拝聴しました。午後からは、小中学校に分かれての公開授業研究会行われ、授業後の研究協議会や実践発表では、研究授業をもとに、郡市の工夫された授業実践や取組について熱心な協議が交わされました。

また、本研究会では児童・生徒の体力・健康づくり推進のため、コロナ禍で厳しい状況ではありますが、各郡市で開催される水泳交歓会や球技交歓会、器械運動交歓会等の支援を行い、子どもたちの運動経験を広げています。合わせて、石川県教育委員会とも連携し、「体力アップ一校1プラン」の推進や、「スポチャレいしかわ」への積極的な参加を促す活動も行っています。さらに、県内の大学や地域の専門機関の指導者をモデル校に派遣し授業の充実とバランスのとれた体力向上を図るスポーツ庁委託事業「体育授業の充実・体力向上アクションプラン」にも協力をしています。

このような事業を通して、本県児童・生徒の「豊かな心とすこやかな身体」を育てることが、学校体育に携わる私たちの願いです。そして学校体育は、仲間とともに学ぶところに大きな特性があります。今持っている力で運動やスポーツを楽しむことからスタートし、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業はどうあるべきかを「体育科の見方・考え方」や「学習過程のデザイン」「学習評価の改善」といった視点で見直ししていく必要があります。そのためにも、県内小中学校体育指導者が力を合わせ、本研究会の事業を一層充実させていかなければならないと思っています。今後とも本会へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

（文責 金沢市立諸江町小学校 大井川 久）

令和五年度役員

- 会長 村上 誠（押野小）
- 副会長 高橋佐代子（清泉中）
- 〃 宮下 慶子（鹿島小）
- 〃 輪田 靖欣（緑小）
- 総務部長 日向 正志（松任中）
- 研究部長 山岸 朋子（浅野小）
- 調整部長 坂井 雪江（志雄小）
- 広報部長 中社 進（松波中）
- 会計部長 橋本 康信（鳥越中）

広報部員

- 部長 中社 進（松波中）
- 副部長 輪田 靖欣（緑小）
- 幹事 土田 友信（長田中）
- 〃 室谷 卓郎（犀川小）
- 〃 中川 欣哉（内灘中）
- 〃 前田 千里（広陽小）

編集後記

長く続いた新型コロナウイルスによる行動制限も緩和され、学校生活が従来の様式に戻りつつあります。今年度の研究大会は、発表者や大会実行役員のみ会場に参集してのライブ配信で実施しました。参加者の感想からはこの形態はおおむね好評で、今後はハイブリッドも含めてオンライン開催が定着していくのでしょう。一方で授業研究などは、生徒の表情が見えるなどライブならではの醍醐味もあり、それぞれの研究会の方向性が分かれていくところかもしれません。

第十九号発行にあたり、ご協力いただきました関係者の皆様にご場を借りて感謝申し上げます。

（広報部 中社 進）